



## 伝統的言語文化教育における比較神話学からの貢献の可能性

著者	松村 一男
雑誌名	表現学部紀要
巻	18
ページ	113-130
発行年	2018-03-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00004529/">http://id.nii.ac.jp/1073/00004529/</a>

# 伝統的言語文化教育における 比較神話学からの貢献の可能性

松村一男

## —Abstract

Myths, folktales, and legends belong to a group of traditional tales transmitted orally in order to teach members of a community collective social value. For convenience sake, I propose a term “Corpus of Traditional Literary Culture (CTLIC)” for this category. It is different from literature, a product of individual author who wishes to create new expressions. In this paper I will discuss the possible ways to teach this CTLIC in schools mainly focusing upon episodes from Japanese mythology. By commenting notable points in each episode from a point of view of a mythologist, I hope to show which episodes could be used in schools in future.

## 伝統的言語文化コーパス (Corpus of Traditional Literary Culture, CTLIC)

・神話、昔話、民話、民間伝承、説話、おとぎばなし、メルヘン、妖精物語、伝承文学など、いわゆる個人の創作としての「文学」に分類されない、元来は集団によって集団の価値体系を表現するものとして口承で伝承されてきた物語群は、細かな差異よりも創作的文学作品と異なる集合性に着目した場合には、英語では traditional tales, oral tradition, oral lit などと呼ばれて一括されてきた。今回の課題は、こうした伝統的・集合的作品群を教育においてどのように教えていくことが望ましいかという検討にある。

・上記の日本語のカテゴリーは重複していることも、あるいは考え方の違いから同じ対象に別の名称が当てられている場合もある（昔話と民話は英語なら両方ともに folktale, folklore であろう。どちらの語を使うかは立場やイデオロギーの違いにつながっている）。したがって教育の場において、特定の呼び方を使用した場合に想定される混乱、対立を望まないなら、異なる名称の諸カテゴリーに共通する部分だけを総称して考察することが望ましいだろう。しかし上記の英語の呼び方は、これまた歴史的産物であり、それらの翻訳である伝統的物語、口承伝承、口承文芸、伝承文学を用いたならば、これまた伝統的な手垢が付いていて、特定のイメージをあらかじめ付与されてしまう。

・そこでここでは、上記の諸カテゴリーの共通性の側面を表す用語として、伝統的言語文化コーパス (Corpus of Traditional Literary Culture, 以下、CTLIC と略) を用いる（実際の学校教

育の場面においては、「昔からのお話」くらいの用語が適切かも知れない。

・この CTLC に含めない、近似のカテゴリーは以下の二つである。

①伝説と宗教物語。理由はこれら二つのカテゴリーが科学的客観性を無視して、真実であると主張するカテゴリーであり、教育にはなじまないから。もちろん、科学的客観性よりもカテゴリーの真実性を重んじる私立学校での場合は、ここでは対象としていない。

②近代、現代の特定の作家の手になる再話や童話。これら創作作品は文学作品のカテゴリーに入るべきで、除外する。また超自然世界の物語、つまり普通ファンタジーと呼ばれるものも特定作者の文学作品として別個に考察されるべきであろう。

CTLC は「伝統」的な作品に限定される。

・以上、ここで CTLC とするのは、特定の作者を持たず、特定の意図を持たない、伝統的世界観や道徳観が物語のかたちで伝えられ、記録されてきたものに限定される。

・神話、昔話、民話、民間伝承、説話、おとぎばなし、メルヘン、妖精物語、伝統的物語、伝承文学、口承伝承、口承文芸といった諸カテゴリーへの分類は学術的には必要かつ有意義だが、教育の場合にはむしろ混乱を引き起こしやすいだろう。それらを CTLC という一つのカテゴリーに収めて対処することは、教育の場合には有効に働くであろう。

・CTLC というこの包括的なカテゴリーは以下のように定義できるだろう。

①舞台：昔の世界あるいは現実にはない世界（天上、地下、海中など）。

②主人公：通常とは異なる人間（異常な誕生、異常な大きさ、異常な能力、異常な考え方）あるいは動植物。

③プロット：現実の世界とは異なる世界において、それまで存在していなかった事件が起こる。主人公はそれに対処する。その対処の仕方は超自然的つまり非日常的、非現実的である。

④非真実性：こうした特徴を備えた CTLC はその内容について真実性を主張するものではない。その点が伝説や宗教文学とは異なる。それは娯楽性を備え、むしろその非現実性から現実を考えさせる役割をもつ。現実から現実を考えさせることを補足するのとは異なる視点を提供する。

⑤非現実性：別の言い方をすれば、現実を現実から考えることがまだ難しい年代の子どもに対しては、非現実の世界の中の出来事から現実を考えさせる方がより受け入れやすく、有効である場合があると思われる。

## 日本神話の場合

・CTLC のうち、今回のプロジェクトでは具体的に将来の学校教育で教材化の可能性のある日本神話エピソードを検討する。

・だがその前に、果たして『古事記』に代表される日本神話や日本の昔話あるいはその

源泉となった『御伽草子』などは学校教育で教える価値があるのか、という疑問を持つ向きもあるかも知れない。現在、『古事記』は原文と併せた学術的な現代語訳として中村啓信（角川ソフィア文庫）、津田真幸（講談社学術文庫）のものがあり、現代語訳のみのものは三浦祐之（文春文庫）、石川淳（ちくま文庫）、梅原猛（学研M文庫）、竹田恒泰（学研パブリッシング）、福永武彦（河出文庫）、田辺聖子（集英社文庫）らのものがある（なお、全訳ではないが、鈴木三重吉『古事記物語』角川文庫、もある）。翻訳の数の多さから見れば、『不思議の国のアリス』や『星の王子さま』などと肩を並べている。これで人気がないとか文学作品として劣っているとはいえないだろう。他方、日本の昔話はテレビシリーズにもなっているし、福音館をはじめとする数多くの出版社から児童向けに多くの作品が出版されている。これまた人気がないとも文学性に乏しいともいえない。つまりどちらも学校教育に含まれる資格は十分あると思われる。もちろん、『古事記』については、天皇支配の正当化というイデオロギー性が前提としてあるから、その部分は学校教育においては低学年では避け、高学年では必要があれば、そうした側面と向かい合っきちんと意義付けする必要があることはいうまでもない。

・次に昔話についてはこれまでも問題なく学校教育で用いられてきているが、神話についてはイデオロギー性の問題があるし、無理に導入する必要はない、という意見があろう。しかし現実にはすでに日本神話は小学校で教えられている。それを否定する方向もあるだろう。しかし神話研究者として、過去の利用のされ方やイデオロギー性から、CTLCとしての重要性を活用しないのは残念に思え、注意深くだが、むしろ積極的・発展的に利用できないかと思い、プロジェクトとして検討している。

・『古事記』と昔話とは共通の要素が多いが、一つの点では大きく異なっていると思う。昔話には物語の連続性や体系性がないのである。もちろん、それは存在しないのではなく、断片化しているために見えにくいのである。CTLCの意味を十分に生かして教育を行うには、体系性を重視する必要がある。体系性の中でこそ、個別のCTLC作品のメッセージが生きる。『古事記』は世界のはじまりから自然要素の神々の誕生、さらに神々の人間的な感情や暮らしぶりなど、そして神々の世界から人間の世界への移行が連続的に語られており、個別の神話素が単独での意味の他に全体の中での意味ももつ（他の神話素と意図的に対応させられていて、そのことが意味やメッセージを発している）ことを示している。また神話を学ぶことにより、昔話が神話と共通の要素から成り立っていることを教えることが出来る。つまりこれまで別個のジャンルとして取り扱われてきた神話と昔話がCTLCとして、共通の文化的基盤に根差すものであるという重層的な見方を教えることが出来る。

・これまで採用されている作品は、「いなばのしろさぎ」と「やまたのおろち」の二つであり、どちらも小学二年生の国語である。この現状を今後、二つの方向で拡張する可能性を考えてみたい。

①国語以外の教科への拡張（古典、社会科、日本史）。

②小学二年生以外の学年への拡張（小学校の他学年、中学校、高等学校、大学）。

・その際、問題とされる可能性があるのは、日本神話を教えることが、現状の小学校低学年の国語の教科の範囲以上にすることが教育上どのような利点を生むかという点であろう。

・日本神話を学ぶことが、現在の暮らし方や考え方への反省、教訓となりうるか。これは実際に授業案を作り、想定される科目、学年において模擬授業を行い、その反応を調査することによって測定するしかないだろう。机上の議論は無意味である。実験授業の意味はそこにあるし、そこにしかない。

・以下では具体的エピソードを提示し、果たして教材として利用が可能か、可能な場合にはどのような形での授業が可能か、その場合に神話学の立場から、留意点と注意点として、どのようなことが考えられるかを述べてみたい。なお出典は『古事記』に限定する。成立の事情などの背景の説明を簡略にしたいためである。

### ①国生み

あらすじ：イザナギ、イザナミという原初の夫婦が子供として島々を生んでいく。最初に淡路島を生み、次に四国を生んだ。次に隠岐の島を生んだ。次に九州を生んだ。次に壱岐の島を生んだ。次に対馬を生んだ。次に佐渡島を生んだ。そして最後に本州を生んだ。これら八つの島の島が生まれたので大八島国という。

問題点と注目点：現行の日本地図と比べれば、北海道と沖縄本島をはじめとする南西諸島、大島をはじめとする伊豆七島が述べられていない。この話が作られた当時の地理の知識が窺える。誰が、どのようにして知り得たのだろうか。小学校高学年の国語あるいは社会向きか？

### ②黄泉の国訪問

あらすじ：しかし妻のイザナミは火の神を生んだため、身体を焼かれて死んでしまう。妻を恋しく思う夫のイザナギは妻を連れ戻すため、妻が去った黄泉の国に行く。妻は別の世界である黄泉の国の食べ物食べてしまったので、すぐには戻れないからしばらく待ってほしいと告げて姿を消す。妻の帰りを待ちきれないイザナギはイザナミを探す、イザナミは恐ろしい姿をしていたので、イザナギは恐怖に駆られて逃げ出す。イザナミは自分との約束を破った夫に怒り、黄泉の国の女の鬼を遣わして夫を捕えさせようとする。しかしイザナギは身に着いていたカンザシや杖などを鬼たちに次々と投げつけた。すると、それらはさまざまな品に姿を変え、鬼たちが追いかけるのを邪魔した。そうしてイザナギは地上世界に戻ることができた。イザナギは地上世界（生の世界）と黄泉の国（死の世界）との間に大きな石を置いて、これ以降、生の世界と死の世界の行き来が出来ないようにした。

問題点と注目点：①別世界に行く。追手に追いかけられるが、さまざまな不思議な品物の力で逃げおおせる。髪の毛に挿していた黒い木の蔓の輪は投げると野葡萄になった。櫛の齒を折って投げると筍になった。追手がこれらを食べている間に逃げた。最後に桃の木が

あったので、その実を投げて追手を追い払った。これはさまざまな冒険物語によく見られる、主人公が怪物や巨人から逃げるモチーフで、一般的に呪的逃走（マジカル・フライト、magical flight）と呼ばれている。②ギリシア神話には琴の名手オルフェウスの妻エウリュディケが蛇に咬まれて冥界ハデスに行ってしまう、妻を連れ戻すためオルフェウスが冥界に行き、連れ戻そうとするが、振り向いてはいけないという約束を守れなかったため妻を地上に連れ戻すのに失敗するというとてもよく似た神話がある。③イザナギは亡くなった妻を連れ戻すため死の世界である黄泉の国に行くが、そこで妻の願った約束を破って見てはいけない妻の姿を見たために、妻の放った鬼に追跡され、地上の生命の世界に戻ると、死の世界との間に岩を置いて、二つの世界との交流をそれから以降不可能にする。異世界への旅と、その後の二つの世界の断絶については、以下の「海幸と山幸」の個所にも類似の内容がある。

### ③三貴子の誕生

あらすじ：イザナギは死者の世界で穢れたと感じ、川に入って清め（<sup>みそぎ</sup>禊）をする。その際、身に着けていた物を捨てるとそれらは次々と神となった。また体を洗うと神々が出現した。最後に左目を洗うと太陽の女神アマテラスが、右目を洗うと月の神ツクヨミが、そして鼻を洗うと荒々しいスサノオが生まれた。イザナギはアマテラスには天上世界を、ツクヨミには夜の世界を、そしてスサノオには海の世界を支配するように命じた。しかしスサノオはイザナギの命令に従わず、大人になるまで泣いてばかりいた。あまりにひどく泣くので草木は枯れ、海や川は干上がってしまった。あらゆる禍が起こった。イザナギがなぜきちんと海の世界を治めないのかと尋ねると、スサノオは母のいる黄泉の国に行きたいと答えたので、イザナギは怒って、スサノオを勘当した。

問題点と注目点：①死の世界を穢れとしている。また穢れは水によって清めることができるとしている。しかし穢れは単に否定されてはおらず、そこから新しい神々が生まれている。②日月は神々であるとする起原の説明や、世界を昼と夜と海に三分割する見方が示されている。③太陽を女神とすることは世界の神話では珍しい。④最後に生まれた太陽神、月神、海洋神の三神は世界の三領域の支配者として重要とされているが、その誕生は母親ではなく、父親からとされている。これについては、世界は巨人の体から生じたとする世界起源の神話があり、それとの関連が考えられるかも知れない。世界巨人と呼ばれるこのタイプとしては、中国の盤古、インドのプルシャ、北欧のユミルがある。⑤父に息子が従わず、父が息子を勘当している。しかも息子は父から生まれていて母を知らないはずなのに母に会いたいといって大人になりきれぬまま泣き続けて世界を混乱に陥れている。発達心理学、青年心理学、家族心理学の問題例にもなりそうである。

### ④天の岩戸

あらすじ：父によって家族から追放されたスサノオは、姉に別れを告げるため（という口実



で?) 姉の支配する天上の高天原を訪れる。アマテラスは警戒し、境界の天の安河で武装して待ち受けるが、スサノオは心が清らかな証しとして二人で持ち物を交換して、そこから子供を作ろうと提案する。こうしてスサノオが受け取ったアマテラスの持ち物からは女神たちが生まれ、アマテラスが受け取ったスサノオの持ち物からは男神たちが生まれた。スサノオは女神が生まれたのは心が清らかな証しだと主張して高天原に滞在し、その間に多くの乱暴狼藉を働く。アマテラスはスサノオと直接戦わず、洞窟に閉じこもる。太陽(神)が姿を消したため、世界は闇となり、混乱が生じる。神々は集会を催して、アマテラスを洞窟から出すための方策を討議し、実行する。それが成功し、アマテラスは再び姿を現す。スサノオは乱暴狼藉の罪により、罰せられて高天原を追放される。

問題点と注目点：①姉と弟は持ち物を交換して、そこから子供を儲けている。これは非現実的だが、なぜこういう筋書きにしようと作者(たち?)は考えたのだろう。②スサノオはなぜ乱暴狼藉を働くのか。③乱暴狼藉とはどのような種類のもので、そこには何か意味があるか。④姉と弟の関係はどう理解すべきか。それとも CTLC から現実の問題を考えること自体が間違っているのか。⑤太陽が姿を消すが、再び出現するという場面は現実の自然現象と関係があるか、それとも無関係か。⑥太陽が姿を消して再び出現するという神話は日本の周辺諸国に多く見られる。またその反対に、太陽が複数出現したため、一つを残して他は射落とすという神話も同様に多く見られる。こうしたことはどう考えたらよいだろうか。

#### ⑤オオゲツヒメ殺害による穀物起源

あらすじ：高天原から地上に下る途中でスサノオは食物女神オオゲツヒメと会うが、彼女が体から食物を出すのを見て汚いと思って怒り、殺してしまう。するとその死体の各部からさまざまな穀物が生じた。

問題点と注目点：①食べ物の起原について昔の人はどう考えたか。科学以前の時代の人々の知的好奇心を考えるための一例。②神話をはじめとする CTLC には殺害が少なくない。現実と向かい合って生きていく上でも、非現実である CTLC の中での殺害の持つ意味を考えることは重要だろう。

#### ⑥スサノオのヤマタノオロチ退治(小二国語教科書既出)

あらすじ：スサノオは出雲に下り、荒れ狂う川の化身のような八つの頭を持つ大蛇ヤマタノオロチが土地の人々を苦しめていると教えられ、酒を飲ませて酔わせるという策略を用いて殺害し退治する。そして土地の娘クシイナダヒメと結婚する。

問題点と注目点：①スサノオの性格の変化をどのように理解するか。

#### ⑦因幡のしろうさぎ(小二国語教科書既出)

あらすじ：オオクニヌシはスサノオの子孫で、多くの兄たちがおり、家来のように扱われ

ていた。兄たちが因幡の国のヤガミヒメに求婚しようと出かけたときにも兄たちの荷物を運ばされていた。途中の気多の崎に赤裸で苦しんでいるウサギがいたので、治療してやった。ウサギが言うのには、自分は隠岐の島にいたが、本土側に来たいと思い、「ワニ」にどちらが数が多いか比べようと呼びかけて「ワニ」を島から本土まで並ばせ、数を数えるふりをしてその背中を飛んであと一歩というところで油断して、本当の意図を一番端の「ワニ」に自慢したため捕えられ、赤裸にされたというのであった。

問題点と注目点：①しろうさぎとは白いのか。②小さな動物が大きな動物に数比べをしようと嘘をついて並ばせ、その背中を飛んで対岸に渡るという話は周辺諸国にも数多い。そして日本神話以外は、無事に対岸に渡っている。そこでは小さなしかし賢い動物が大きくて強いが知恵の足りない相手に勝つ点に主眼がある。因幡のしろうさぎの場合、なぜ他の類話とは違っているのか。また因幡のしろうさぎは日本神話の一部となっているが、周辺諸国の類話は神話ではない。この違いは何を意味しているのか。

#### ⑧国譲り

あらすじ：オオクニヌシは小さな神スクナビコナや三輪山の神オオモノヌシの協力も得ながら、葦原の中つ国を作った。するとアマテラスは高天原から完成した国土を見て、これは自分の子が支配すべきだと考えて、国土を献上するようにとの使者を送るが、みなオオクニヌシに懐柔されて国譲りは成功しない。そこで剣の神であるタケミカズチが遣わされ、出雲の海岸でオオクニヌシと会い、剣先を上にして立てた上に坐って、国をアマテラスの子孫に譲るように（武力をちらつかせて）談判した。オオクニヌシの子の神の中には抵抗するものもあったが、結局、オオクニヌシらは国土をアマテラスに献上した。

問題点と注目点：①武力をちらつかせて国土を献上させるというやり方は現在ではあまり共感を得られないだろう。こういう部分は隠蔽して教えないか、あるいは逆に、大変に問題がある部分だとした上で、実際、過去の日本においては周辺諸国への帝国主義的支配という類似的行為があったとまで踏み込むか、決める必要がある。後者の選択は高学年なら可能かも知れない。その場合、神功皇后の軍が新羅と百済を侵略したという、史実に反する記述についても、なぜそういう記述が入れられたのかを含め、説明することも望ましいかも知れない。CTLCの中で日本神話は際立ってイデオロギー性が高いからこそ、過去に政治的に利用されてきたのだし、神話にはそうした政治的・イデオロギー的利用をされる危険性があるときちんと説明するのもかえって良いかもしれない。無視や黙殺をしたまま神話教育を行うことは不可能ではないが、しかし、積極的に問題を認識させることにより、神話教育を平和教育とつなげていく可能性も出てくる。

#### ⑨ニニギの天降り

あらすじ：アマテラスは子のオシホミミに葦原の中つ国に下るように命じるが、オシホミミは生まれたばかりの子ホノニニギを代わりに下らせると答える。ニニギは他の神々を従



えて日向の高千穂の峰に下る。

問題点と注目点：①新たに日向、高千穂など南九州の地名が出てくる。なぜなのか。

#### ⑩木花咲姫

あらすじ：ニニギは山の神の娘コノハナサクヤビメと出会い、彼女を妻にしたいと父親のオオヤマツミノカミを訪れる。するとオオヤマツミは姉のイワナガヒメも一緒に妻にして欲しいと述べる。しかしニニギは花のように美しいコノハナサクヤビメは妻にしたいが、岩のような姉は妻には要らないと拒絶する。

問題点と注目点：①原初、神は人間に対して食物と石の二つを示して、どちらかを選択させたが、人間は食物を選んだので、死ぬようになった、もし石を選んでいたら、石のように永遠の生命が与えられただろう、という「死の起源神話」が日本周辺の国々に知られている。

#### ⑪海幸と山幸

あらすじ：ニニギとコノハナサクヤビメから生まれた三人の男子のうち、長男は海の漁師となり海幸と呼ばれ、三男は山で猟をし、山幸と呼ばれた。山幸は海での漁を体験したいと思い、兄に願ってその釣り針を借りて釣りをするが、魚に釣り針を奪われてしまう。兄の海幸が、その釣り針は特別なものだから、どうしても取り戻せというので、山幸が困って浜辺で泣いていると、知恵者の海の老人シオツチノカミが現われて、海の底にある海神ワタツミノカミの宮殿に行く方法を教えてくれる。そこで海神の娘トヨタマヒメと会い、夫婦となる。釣り針も取戻し、兄に復讐をするための海の潮を操る玉ももらい、「ワニ」の背に乗って地上に戻り、潮を操る玉を使って兄の海幸を降参させ、召使いとさせる。海幸の子孫は隼人族として天皇の警備をしたとされる。やがてトヨタマヒメが出産のために山幸のもとに来るが、出産場所である産屋が未完成のうちに産気づき、夫の山幸に、出産時には本国の姿になるので、見ないでほしいと嘆願するが、山幸はその願いに背いて妻が「ワニ」の姿で出産しているのを見てしまう。トヨタマヒメは夫に姿を見られたことを恥じて、生まれた息子のウガヤフキアエズを夫に託して海の国に帰って行ってしまう。そしてこれ以降、陸の世界と海の世界の交流は途絶えたとされる。しかしトヨタマヒメが生まれたばかりの息子のことが心配で、乳母として自分の妹のタマヨリヒメを遣わす。ウガヤフキアエズは成長して、タマヨリヒメを妻とする。

問題点と注目点：①釣り針を借りた人が漁に出て釣り針を失くしてしまい、取り戻すために海の底の国に下って、そこの娘と結婚し、釣り針も取り戻して魚の背に乗って地上に戻り、彼を責めた相手に復讐するという話は、「失われた釣り針」という名称で周辺諸国、特にインドネシアに広く知られている。ただしここでも、上記の「因幡のしろうさぎ」と同様に、他地域では娯楽のための民話とされている。民話としての「失われた釣り針」と神話としての「海幸・山幸」ではどこがどのように違っているのだろう。②父のニニギは天

の神の息子で、山の神の娘を妻とし、息子の一人の山幸は海の神の娘を妻とした。こうした夫婦関係・親子関係の系譜の作り方は意図的であろう。ではその意図とはどのようなものだろう。③イザナギとイザナミの個所で生命の世界と死の世界の交流の断絶が語られ、ニニギの天下りでは天上世界と地上世界の断絶が語られ、海幸と山幸の個所では、地上世界と海の底の世界との断絶が語られる。こうして人間の世界は死の世界とも天上世界とも海底の世界ともつながっていない独立した世界として描かれることになる（ただし山の世界とはつながっている点にも注意）。こうしてイザナギとイザナミの国生みから始まった古国土創造は他の世界との断絶により領域を限定して完成する。『古事記』編纂者（たち）はこの段階で「神話」は完結したとし、ここまでを上巻としたのであろう。

## ⑫神武東征

あらすじ：ウガヤフキアエズの子孫であるカムヤマトイワレビコは、兄のイツセノミコトとともに国の中央である大和に行こうと高千穂から船で旅立ち、瀬戸内海を通して大阪湾から上陸しようとするが、土地の豪族ナガスネヒコとの戦いとなり、イツセノミコトは亡くなる。そこでカムヤマトイワレビコは大阪からの上陸を諦め、紀伊半島を迂回して、熊野から上陸し、山中を進んで、吉野を経て、大和の橿原に到着して、そこで即位をして初代の天皇である神武となった。

問題点と注目点：①上巻は「神話」であり、歴史的な存在と認識されていた「天皇」は登場しない。中巻は歴史として認識され、神武を初代とする「天皇」についての記述が中心となる。天皇という存在は現実にも今も日本にいるし、天皇家の系譜は断絶なく続いてきたという「万世一系」は政府の公式見解であろう。従って、歴史的な起源については別に教育すると断った上で、現存の最古の記録ではこう書かれていると紹介することは可能だし、必要とも思える。②考古学的に見れば、南九州の豪族が大和に進出してきて王朝を開くという叙述は歴史的事実とは認められない。またその後の天皇の統治や寿命の記述を見ても、それらの初期の天皇の系譜は架空のものであると考えるのが妥当であろう。ではなぜアマテラスの孫のニニギが高千穂に下り、その子孫のカムヤマトイワレビコが南九州を出て、紀伊半島を迂回し、熊野の山中から吉野を経て大和の橿原で即位するという筋書きを選んだのであろう。そこにどのような意図があったのだろうか。

## ⑬ヤマトタケル

あらすじ：景行天皇の皇子オウスは気性が荒く、兄の皇子オオウスを殺害してしまう。天皇はこうしたオウスを恐れかつ疎んじたようで、次々と各地に遣わして朝廷に抵抗する地方豪族を退治させる。オウスは策略も用いつつ、戦いに勝利する。まず九州の熊襲の兄弟クマソタケルを退治するに際しては、女装して油断させて殺害し、その際にヤマトタケルの名前を得ている。次に出雲に行き、同地の支配者イズモタケルと友情を結ぶふりをして、刀を交換しようと提案し、相手には木刀を渡し、相手から渡された刀で相手を殺している。

ついで東国に遣わされ、原野で火を放たれて危機に陥るが動物に助けられて命拾いをし、任務を果たして、大和に帰還する途中、油断して、太刀を持たないまま山の神を退治しようとし、却って病を得て亡くなる。その靈魂は白鳥となって故郷の大和に向けて飛んでいく。

問題点と注目点：①ヤマトタケルを祀る神社は多数あるし、小説、漫画、映画、歌舞伎、ゲームなどの主人公として多くの人々が名前を知っている。実在については確認できないが、だからといって教育の中で無視することが最善なのか疑問も残る。②CTLIC としてみれば、ヤマト地方の英雄（タケル）がクマソ（九州地方）のタケル兄弟を女装して退治し、次に出雲地方タケルを騙して退治し、東の地方では危機に陥るも無事に生還するが、最後に油断して命を落とす、という典型的な英雄のパターンを踏襲している。現代でも人気があるのはむしろ当然である。スサノオも龍退治の英雄のパターンを示すが、悲劇的な死の要素を欠いているので、ヤマトタケルの方が英雄神話としては優れている。③正々堂々の戦いという倫理や道徳は示されていない。相手を騙しても勝利する方が偉いとなっている。こういう価値観が古来の日本にあったと教えることが良いのか悪いのかは教育現場の判断になるのだろうか。

#### ⑭まとめ

これまで見てきた十三の要素からは、『古事記』が異界訪問、禁忌の不順守、結婚、親族間の争い、普遍的パターンの英雄神話などといった、異なる由来をもつさまざまな要素が組み合されて成立していることが確認できる。世界のはじまりから国土の確定（他の世界との分離と交流の断絶）と支配者によるその国土の獲得、そして最終的な支配者による即位とその後も続く抵抗への平定の物語という一貫した流れを作るために異質な要素がモザイク状に組み合わせられて一つの作品となっている。誰のどのような意向を受けて、誰が作成したのかなど考えるべき問題は多いが、学童に教えるのが難しいからといって敬遠するだけでなく、そこから学び考える素材をどのような形で提供できるか、という積極的な活用が盛んになることが望ましい。なお、特に後半の⑧、⑨、⑫、⑬については、天皇制イデオロギーとの関連で学校教育には相応しくないという意見もあるだろう。しかし高学年ならば、逆に問題点を考えさせる契機として利用することも出来るし、いわゆる平和教育とは異なった視点から、過去の在り方の問題を考えるための手掛かりになると思う。

#### 昔話の場合

・CTLIC 教育という観点から見れば、古事記神話も昔話も教材としての価値は等しい。内容的にも重なる要素が多い。ここでは古川 2013 を参考に、また同書の考え方も併せて紹介しつつ、昔話についても神話の場合と同様に、教育の場面における問題点と注目点を列挙してみる。その際に眼目となるのは、日本神話と日本昔話とが共通の基盤を有するという前提である。これについてはあらかじめ証明することは不可能だが、そうした前提に

立って昔話の諸要素を説明し、それが説得的なものであるならば、前提が正しいということになるはずである。それはつまりは最初に提案した CTLC という単位の妥当性ともなる。昔話の古形を示すのが室町時代から江戸時代にかけてまとめられた『お伽草子』である(市古 1958)。鉢かづき、一寸法師、浦島太郎などが含まれている。このようにするならば、CTLC として古代の神話、近世の草子、そして現代の昔話に共通する物の見方、考え方を学ぶことが出来るだろう。しかしその際には、同時にそうした見方が周辺諸国とどれだけ共通であるか、あるいは独自であるかを並行して比較しつつ学ぶことが欠かせない。以下では a. 神話とのつながり、b. 周辺諸国の CTLC との比較の有効性、の二点を指摘する。

### ①桃太郎

問題点と注目点：怪物退治のモチーフは全世界的に見られる。しかしより具体的な、なぜ従者がイヌ、サル、キジの三種類の動物なのか、という点には具体的な説明が望ましいだろう。以下のようないくつかの説明が提示されている。

- ・グリム童話の「ブレーメンの音楽隊」と同じで、力の弱い者が協力して力に勝る敵を倒す。
- ・中国の陰陽五行説に由来する十二支において、鬼がやってくるとされる方位は丑寅である。このため鬼はウシ(丑)のように角を生やし、トラ(寅)皮の褌を着けた姿とされている。この鬼に対抗する方角に位置するのがサル(申)、トリ(酉)、イヌ(戌)である。
- ・インドの叙事詩『ラーマヤナ』にはサル軍の将軍ハヌマーンが、そして中国の小説『西遊記』にはサルの英雄孫悟空が登場し、怪物を退治している。『西遊記』の場合にはサル以外にブタ(イノシシ)の猪八戒、ワニをモデルとした可能性もある沙悟浄らも三蔵法師に付き従っており、リーダー+三種類の動物の従者という、桃太郎の場合とよく似た構成を示している。こうした外来のサルにまつわる物語が影響した可能性がある。
- ・イザナギが黄泉の国の鬼たちに追跡された時に、イザナギは桃の実を投げつけて追手を退けている。桃の節句があるのも、桃には陽気(生命力)があり、鬼が体現する陰気を退けるという考え方であろう。桃が邪気を払うという中国に由来する観念が神話にも昔話にも共通して認められる。

### ②かちかち山

問題点と注目点：ウサギがタヌキをやっつける話である。神話にも因幡のしろうさぎがある(上述)。因幡のしろうさぎは、周辺諸国に広く見られる賢い小動物が愚鈍な大動物を欺いてその背を飛んで対岸にたどり着くという民話と結末だけが異なっている。神話としてはその部分が重要なのである。かちかち山には因幡のしろうさぎで神話にするために変更した部分が残っていて、ウサギは相手のタヌキを欺いて、自分は傷つくことなくやっ

けている。この相手を欺くという要素は、因幡のしろうさぎではオオクニヌシの兄たちヤソガミがしろうさぎに偽りの治療を教えている部分に形を変えて残っていると思われる。

### ③三枚の護符

問題点と注目点：寺の小僧が山で老婆に会い、栗をいっぱい食べさせると誘われる。話を聞いた和尚は、その老婆は人食いの鬼婆に違いないから行くなと止めるが、小僧は聞かない。そこで護符を三枚渡して、危ない時には後ろに投げろと教える。夜になって小僧が見ると、老婆は角が生え、口が耳まで裂けている。小僧は小便に行くといって外にでて、自分の身代わりに護符を貼って逃げる。しばらくして鬼婆は気づいて追いかけてくる。小僧は護符を投げて大きな砂山を出現させる。また追いつかれそうになり、三枚目を投げて大きな川を出現させる。そうして寺に飛び込んで和尚に隠してもらい、和尚はやって来た鬼婆を頓智で退治する。この昔話は明らかに、神話のイザナギによる黄泉の国からの逃走の仏教説話化である。

### ④鉢かづき

問題点と注目点：美しい姫が継母に追い出され、醜いみすばらしい姿となり、しかし最後にはその美しさが発見されて結婚に至るという筋書きである。なぜ姫が醜いみすばらしい姿になるかといえば、それはこの昔話が少女の成人の過程（加入儀礼・イニシエーション）について語っているからである。だからこそ世界中に同じ話型が存在する。人間の成長過程における共通の経験に基づく民話なので、いつでもどこでも語られてきた（なお、こうしたことは、民話がある特定の時代に特定の地域で作られて伝播によって広まったことを否定するものではない）。アメリカの人類学者ルース・ベネディクトは『文化の型』の中でブリティッシュ・コロンビア州のカリヤー・インディアン<sup>1</sup>の例を示している。彼らは、「娘の性的成熟に対する恐怖」を持っており、そのため少女たちは、「三～四年におよぶ」、「生きたままの埋葬」と呼ばれる隔離を受け、「その期間中娘は野生の中で一人で生活する。ふつうの通路から遠くはなれた場所に木の枝でつくった小舎にひとり住むのである。この娘をひと目みることもおそろしいこととされ、その足あとさえ道や川を不浄にすると信じられている。娘はなめし皮の大きなかぶりものをつけているが、それは顔や胸をかくし、背中から地面にとどく。腕と足は野獣の筋でつくられたバンドをまくが、それはこの娘の体にあふれている悪霊からかを守っているものである。この娘は自分が危険状態にあると共に、すべての他人にも危険をおよぼす源になっているのである」（ベネディクト 2008：50）。

### ⑤一寸法師

問題点と注目点：④の鉢かづきでは、追い出された姫は悲しみのあまりに川に身を投げるが、鉢が水に浮かんで死にきれず、川を流されていく。一寸法師は鉢かづきの逆転した姿であり、鉢に乗って川を流れてくる（古川 2013：148）。だとすれば、鉢かづきを少女が大



人になるための加入儀礼を昔話としたものであるのに対応するものとして、一寸法師は少年が大人になる加入儀礼についての昔話であろうと予想される。少年は小さきゆえに馬鹿にされるが、策略によって姫君を妻とする。そして、鬼の住む島に行き、鬼に呑み込まれるが、体内で暴れて、鬼は逃げ出し、残して行った打出の小槌によって大きくなり大臣になる。恐ろしい敵（鬼）を退治するという英雄神話とも共通する話の要素（話素）は、桃太郎と共通する。本来の流れなら、姫を妻とするのは鬼を退治して体が大きくなった後のはずだが、ここでは小さな少年が策略を用いて姫君を妻にするという語りの面白さの方がより重視された結果、順序が逆になっているのであろう。

#### ⑥花咲爺さん

問題点と注目点：正直爺さんと隣の悪い爺さんが、正直爺さんのイヌに対する行為からイヌ（動物）は死んで埋められるとそこから木（植物）が生え、木から臼を作って（自然から文化への移行）突くと大判小判が出てくる（金属）。その後の、隣の爺さんが臼をもやしてしまうと正直爺さんがその灰を撒き、枯れ木に花が咲くという下りは、灰（死）から花（生命）が生じるという生と死の循環の観念を示すとも考えられるし、より实际的・歴史的・文化的な焼畑農耕の伝承の残存とする見方もできる。

#### ⑦浦島太郎

問題点と注目点：いうまでもなく海幸・山幸と同じ、海の底の異郷を訪問する話である。浦島の相手の女性が「カメ」で、山幸の相手の女性が「ワニ」なのは、昔話と神話の聞き手の違いを示す。類話は『丹後の国風土記』（逸文）、『万葉集』（巻9・1740）にもあるので、比較が可能である。玉手箱とそれを開くと立ち昇る煙とは何かを考えるのも意味があろう。

### 日本神話と CTLC 教育

- ・日本神話を含む CTLC の学校教育での遂行と意義づけを最後に考えたい。

日本の CTLC には周辺諸国の CTLC と共通するものが少なくない。学童は、日本の CTLC が周辺諸国のそれと共通性が高いことを、例えば総合学習の一環として、彼ら自身の調べものを通して客観的データとしてまとめ上げ、その過程で共通性をより具体的に納得することも出来るだろう。そしてそこから、周辺諸国の学童と共通の文化遺産を持っていることを意識しながら敵対や対立や反発ではなく友好を模索していく可能性を広げることが CTLC 教育の眼目の一つである。ただし、こうした共通性については勿論、これまでも指摘がなされてきた。しかし過去においてはかえってそれが日本による周辺諸国支配の根拠として悪用されたという経緯もあるので、当然ながら指導する側の慎重な対応が必要となる

- ・そうした拡大解釈の悪しき例として戦前・戦中期の二つの神話研究を紹介する。一つ

は松村武雄『民族性と神話』（松村 1934）、もう一つは中島悦次『大東亜神話』（中島 1942）である。松村の著作は世界各地の神話とそれぞれの担い手の民族性の関係を考察しており、エジプト、ギリシア、ローマ、北欧、ケルト、日本についての章がある。日本神話については該当章の冒頭で次のように述べられている（松村 1934：365－367、旧かなを改めた）。

ある意味においては、日本神話くらいよく纏まった形をしたものは、ほとんどまったく他の民族に見出されない。（中略）日本神話は記紀の表現するところにしたがうと、個々の物語がある一つの主旨とプロットによって結びつけられており、かつ時間的に順序を追って展開している。そこに日本神話の全体としての特徴が存している。（中略）記紀に纏めあげられている神話が、そのはじめにあっては、すべて個々別々のものであったと信じることは、自分のなしえないところである。自分の見るところに誤りがなかったら、それははじめから大和族の首長としての皇室の出自を説くことを主旨とし、そして若干の神話が相結んでその主旨を表出していたと思う。（中略）かくして纏め上げられた日本神話を貫いている主旨―統一原理とでもいうべき観想・精神は、何であったか。それこそ誰でも知っているように、国家・皇室を中心とする建国精神である。我が民族はすこぶる古くから、皇室・国家・臣民の間に密接不離の関係を観じ、皇室・国家への忠誠を自己完成の大道と信じていた。神話群を整序統一すべき原理として、這般の精神が主力となったのは、まことに自然の帰趨でなくてはならぬ。

前半の特徴についての記述は現代でも通用するが、後半の意味づけ（下線部）はあからさまに国家主義的である。

皇室＝国家＝臣民という一体性を神話に指摘し、そこから皇室・天皇への絶対的帰依を正当化するこうした傾向は、1937年の国体の本義の編纂以降に刊行された中島の著作においてより一層顕著となる（中島 1942：172－175、181）。

日本の天地開闢神話が、進化型（系図型）・発展型・出生型・変成型・部判型等の神話の総合統一された堂々たる大神話を形成していることは既に見渡したとおりである。しかも、それは有機的な関係において巧みにまとめ上げられている。（中略）我が神話が、今日見られるような形の堂々たるものになったのは、我が国体を背景としてはじめて成生されたからである。したがって我が神話には、古代の国家観・君臣観が最も著明に現わされているということが出来る。であるから、我が国体観が、神話を基礎として考究されることは正当なことと言わなければならない。（中略）日本神話の特徴はすなわち日本民族の特徴であり、それは実に今度の大東亜戦において実証的に示されるのを見るものである。日本神話の特徴が今日なお生きているということはまた、日本の国体が綿々として二千六百余年を貫いて止まないという歴史と表裏をなしてい

るものであって、ここにはじめて意義深いゆえんを認めることが出来るのである。

我が国民には永遠性の信奉の強かったことが一特徴である。であるから我が国の神話においては、光明・正善の原理と暗黒・邪悪の原理の対立が強烈でなく光明善神は暗黒邪神をほとんど苦もなく退散せしめて、建国理想の実現に邁進する。すなわち永久性の信奉は必勝不敗の新年を培う因子となったものと思われる。

こうした過去における日本神話の政治的利用の誤謬を見て、その再来を危惧して神話教育自体を否定するか、こうした不幸を再び繰り返さないためにも日本神話を直視出来るような教育を目指すかについて、議論していかねばならない。

・次に『古事記』神話だけに限るなら、周辺諸国の共通性の他に、現代に通じる要素をどう取り扱うかという問題も考慮する必要がある。上記の例では死の穢れの観念、水により穢れを払う禊の観念、夫婦関係（イザナギとイザナミ）、親子関係（イザナギとスサノオ）、兄弟関係（アマテラスとスサノオ）、成長と発達（スサノオ、オオクニヌシ）、策略を用いた勝利（ヤマトタケル）などである。もちろん、CTLCはルポルタージュやノン・フィクションではないから、現実そのままとはいえないが、しかし、現実についての問題意識を読み取ることは出来るだろう。また、ある程度の留保をつけるなら、とくに古墳時代、飛鳥時代については、歴史資料の一つとして、考古学的史料と併用しつつ、日本文化の歴史の中で現代の問題を考える役にも立つだろう。現状では、過去の「日本神話」の政治的・イデオロギー的利用に懲りて、教育の場では「神話」への抵抗が依然として強い。そのためせっかくの豊かな文化遺産を十分に教育の場で活用していない。周辺諸国との国際関係もあるので慎重さと自制は必要だが、現代と過去そして未来を結ぶ文化的要素として日本神話を含むCTLCが学校教育においてより積極的に導入されていく可能性はこれからも探っていくべきだろう。

## 付論

### 太平洋戦争期の国民学校 国語教科書

戦前の国民学校国語教科書（昭和16-18（1941-1943）年）の神話・昔話・歴史教材とそこに込められた意図を考える。なお、神話には一重下線を、昔話には二重下線をしてある。これを見ると、三年生までの低学年は昔話中心、四年生と初等科の一年は神話中心、初等科二年以降は神話の割合が減っていき、歴史物語に比重が移っていくという傾向が認められる。

ヨミカタ 一（昭和16）

・シタキリスズメ（64-67頁）

- ・ モモタロウ (71－87 頁)

#### ヨミカタ 二 (昭和 16)

- ・ 三章 ウサギトカメ (12－15 頁)
- ・ 七章 サルトカニ (23－30 頁)
- ・ 十七章 ネズミノヨメイリ (65－77 頁)
- ・ 二十一章 花サカヂヂイ (86－93 頁)

#### よみかた 三 (昭和 16)

- ・ 三章 國引き (13－15 頁)：「神さま」とだけあり、個別の名前は出ていない。
- ・ 六章 牛わか丸 (19－23 頁)：五条大橋
- ・ 十二章 ねずみのちゑ (42－44 頁)：ネズミとネコ
- ・ 十四章 一寸ぼふし (51－55 頁)
- ・ 二十六章 うらしま太郎 (97－113 頁)

#### よみかた 四 (昭和 17)

- ・ 二章 早鳥 (6－13 頁)：楠の巨木から作られた高速の船の話
- ・ 七章 かぐやひめ (32－41 頁)
- ・ 十七章 白兔 (80－88 頁)：わにざめ、大国主。絵は白いウサギとサメ
- ・ 二十五章 羽衣 (116－125 頁)：美保の松原

#### 初等科国語 一 (昭和 17)

- ・ 一章 天の岩屋 (4－8 頁)：岩屋に籠るところから岩屋から出るまで
- ・ 六章 八岐のをろち (25－31 頁)：「出雲におくだりになって～」と始まり、理由は述べられていない。剣を発見して天照大神に献上するところで終わる。
- ・ 十一章 少彦名神 (56－63 頁)：「大国主が出雲の海岸を歩いていると～」と始まり、ひきがえる、かかしも出てくる。姿を消して終わる。
- ・ 二十章 ににぎのみこと (96－101 頁)：天照大神の命令から始まる。天のうずめ、猿田彦も出る。
- ・ 二十四章 つりばりの行くへ (124－144 頁)：海幸・山幸

#### 初等科国語 二 (昭和 17)

- ・ 一章 神の剣 (4－8 頁)：高倉下について。終わりは、「御軍人たちは～勇ましくふるい立って、大和へ進軍しました」
- ・ 五章 田道間守 (20－24 頁)：「垂仁天皇の仰せを受けた田道間守は～」と始まる。
- ・ 十章 聖徳太子 (50－54 頁)：聖徳太子四歳のこと、正直さの礼賛。ジョージ・ワ

シントンのサクラのエピソードのよう。

- ・十七章 菅原道真 (98-102 頁) : 矢の枝。オデュッセウスの弓比べの場面のよう。

#### 初等科国語 三 (昭和 17)

- ・三章 日本武尊 (14-23 頁) : ①川上たける (14-18 頁) : 熊襲のかしら ; ②草薙劍 (18-23 頁) : 「熱田神宮にある」で終わる。
- ・六章 光明皇后 (32-36 頁)
- ・十二章 千早城 (57-61 頁)
- ・十三章 錦の御旗 (61-65 頁) : 「大塔宮は北條高時征伐のため～」と始まる。大塔宮とは後醍醐天皇の皇子、護良親王 (もりながしんのう) のこと。

#### 初等科国語 四 (昭和 17)

- ・六章 くりから谷 (29-31 頁) : 木曾義仲、平維盛
- ・七章 ひよどり越 (31-34 頁) : 一の谷、義経
- ・八章 萬壽姫 (35-43 頁)
- ・十四章 扇の的 (71-74 頁)
- ・十五章 弓流し (74-76 頁)
- ・十七章 廣瀬中佐 (86-88 頁)

#### 初等科国語 五 (昭和 17)

- ・一章 大八洲 (4-6 頁)
- ・二章 弟橘姫 (7-9 頁)
- ・十章 武士のおもかげ (57-63 頁) : ①雁のみだれ (57-59 頁) : 八幡太郎義家と大江匡房 (おおえのまさふさ) ; ②かりまたの矢 (59-61 頁) : 義家 ; ③目を射抜かれて (62-63 頁)

#### 初等科国語 六 (昭和 18)

- ・十四章 源氏と平家 (99-114 頁) : ①宇治川の先陣 (99-104 頁) ; ②敦盛の最期 (105-110 頁) ; ③能登守教経 (110-114 頁) : 「のりつね」

#### 初等科国語 七 (昭和 17)

- ・九章 鎮西八郎為朝 (58-67 頁)
- ・二十章 古事記 (126-132 頁) : 序文と成立について

#### 初等科国語 八 (昭和 18)

- ・六章 萬葉集 (39-47 頁)



- ・十二章 菊水の流れ (88-101 頁) : ①櫻井の驛 (88-90 頁) ; ②湊川の戦 (90-93 頁) ; ③母の教へ (94-96 頁) ; ④吉野参内 (96-101 頁)

——参考文献

- 市古貞次校注『御伽草子』岩波書店 (日本古典文学大系 38)、1958  
門田真知子編『因幡の白兔神話の謎』今井出版、2008  
倉野憲司校注『古事記』岩波書店 (日本古典文学大系 1)、1958  
高橋早苗／山口康助編著『神話・伝承をどう教えるか』明治図書、1968  
中島悦次『大東亜神話』統正社、1942  
古川のり子『昔ばなし—あの世とこの世を結ぶ物語』山川出版社、2013  
文部省『国民学校 国語教科書』(ヨミカタ 1・2、よみかた 3・4、初等国語 1~8)、大空社、復刻、1986  
ベネディクト、ルース『文化の型』米山俊直訳、講談社学術文庫、2008 (Ruth Benedict, *Patterns of Culture*, Houghton Mifflin, 1934)  
松村武雄『民族性と神話』培風館、1934

\* 本研究は JSPS 科研費 16K02185 の助成を受けたものです。